
迷宮のストラテジー 1

堂餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮のストラテジー 1

【Nコード】

N5964E

【作者名】

堂餓鬼

【あらすじ】

大学2年生の藤森真治は、とある事件に巻き込まれる。その事件というのは、友達をも裏切る悲しい事件だった。果たして、真治は、事件を無事解決出来るのか？

第1話：平成のシャーロック

ホームズ誕生

俺は、太陽の光が眩しくて目を覚ました。時刻は、朝の6時15分だった。普段より早く、起きてしまった。

俺は、目を擦りながらベットから這い出て、顔を洗った。目が覚めた所で、大学に行く準備を始めた。準備を始めようとしたが、ある事に気付いた。

「そっか・・・今日は、日曜日で大学は、休みなんだ。早く起きて損した。」

大学に行く準備を止めて、俺は家の近くにある喫茶店に、足を運んだ。その喫茶店は、かなり広くて、料理の味も、決して悪くはない家から近い事もあってか俺の行き付けの店になっていた。

客も結構入っていて、繁盛しているみたいだ。殆どが、男の客なのだが・・・その客の狙いは、つい最近、この喫茶店で働きた女の子のようだ。

意外に、人気がある。俺は、店員に席を案内してもらい、コーヒーを注文した。

1分と掛からない内に、コーヒーが運ばれてきた。コーヒーを運んできたのは、人気のある店員だった。

「最近、よく来てくれますね。」店員は笑顔で、話しかけてきた。

「家が、近いからね。」

俺も、笑顔でそう答えた。

見た所、歳は同じ年位に見えた。楽しい一時が過ぎ去っていく。この時俺は、まだ身近で事件が起きるという事は考えもしなかった。そして、その事件を自らの力で解決するという事も・・・。平日の午後、大学が終わり、行き付けの喫茶店に足を運んだ。俺は席に着き、コーヒーを注文した。その時、喫茶店にあるテレビのニュースが、目に飛び込んできた。

そのニュースとは、一人の女の子が誘拐されたと言うものだった。

なんと、その女の子はここで働いている『鳴瀬美紀』だった。

ニユースには、まだ続きがある。犯人は、【美紀】を誘拐して、身代金 1億円を要求していると言う。俺は、急いで彼女の住所を調べ、彼女の家に向かった。彼女の家に着き、チャイムを鳴らした。何回か鳴らしていると、家の住人が出てきた。

家を出てきた人を見て、俺は驚いた。なんと、家から出てきたのは、誘拐された張本人だった。彼女も驚いたらしく、目を丸くしている。「どうしたの？」

「いや・・・どうしたのって言うか・・・」俺は、言葉に詰まる。

「君は、大丈夫なのか？」

「何が？」 「いや・・・何がじゃなくて・・・。」

「・・・？」

「今ニユースで、君が誘拐されたって」

「へ・・・!？」

「だって・・・私ここに居るよ？」彼女は、困惑気味だった。勿論俺自身も困惑していた。さっきまで、誘拐されたとされる張本人が、俺の目の前に立っているのだから・・・俺は彼女の家に上がり、彼女と二人で頭を捻らし、考えた。・・・が、中々解らない。

何故、彼女が誘拐された事になっているのか。二人が考えを巡らせ、てる時に、一本の電話が掛かってきた。緊張が走る・・・彼女に出るように促した。彼女が、腰を上げ受話器に手を伸ばし、電話に出た。

「もしもし・・・？」彼女が電話に出た瞬間、彼女はホッとしたような表情になった。

電話が終わり、彼女はまたソファに腰を下ろした。

「誰から？」俺は彼女に、聞いた。

「私の友達のお母さん」彼女は、答えた。電話の内容は、彼女の友達が帰ってきていないが、何処に居るか知らないか？と言うものだった。

彼女は友達に、電話を掛けてみた。一向に繋がらない。終いには、

留守電になってしまった。彼女は、段々不安になってきているみたいだ。

彼女が誘拐されたニュースと、友達の行方と、何か関係があるのか・・・？俺は彼女に聞いてみた。

「最近、【美紀】の周りで何か起こらなかったか？」

彼女は腕組をしながら、何やら考えているようだ。彼女が、何やら思い出したように『あっ』と言った。

「何か思い出した？」 「うん。昨日んだけど、私の家に電話が掛かってきて、一億円用意しろって。用意出来なかったら、娘の命は無いって。」 成る程。俺は、口を開いた。

「恐らく友達は、【美紀】に間違えられて、誘拐されたんだ。」

「えっ!？」 彼女は、驚いた表情をした。

「恐らくはな」 もう一度、呟いた。

「でも、どうして私と間違えて誘拐されるの？」

「多分それは、友達が君の家に居たからだろう。だから、犯人が君と 友達を間違いして、誘拐してしまった。」 「じゃあ私の家に掛かってきた電話は・・・？」

「君を誘拐したと勘違いしていたから、君の家に身代金を要求する電話が、掛かってきたんだろう。」

「・・・私に勘違いされて誘拐されたんだ・・・」 彼女はその話を聞いて、落ち込んでしまった。

「大丈夫だって。俺が絶対に、見つけ出すからさ。」 俺は、彼女を励ますようにそう言った。

「ホント!？」 彼女は、期待するような眼差しで俺を見つめてきた。

「お、おう」 曖昧な返事をしてしまった。

「ありがと、私も出来る限り協力するね。」 それだけ言うと、満面の笑みを溢した。

『安請け合いをしてしまった』と俺は、その時思った。解決出来ればいいが・・・。彼女の友人が誘拐されてから、1日が経った。今の所、有力な手掛かりは掴めていなかった。事件も難航している・・・

・。今日も【美紀】と二人で、事件を解決させようと、捜査を始めた。色々と、聞き込みをする内に有力な手掛かりを入手した。それは、女の子を連れ去っていく人物を目撃したと言う事だった。そこで俺は、ある事を思い出した。

「あつ、そういうば」

「何？」 「俺の知り合いに、刑事がいる事すっかり忘れてた」

「へ？ 警察に行つて何するの？」

「情報を聞き出すのさ。」 そう言つて二人は、警察署に出向いた。

「よつ、オッサン、久しぶり」

「何だ、【真治】か。つてかその呼び方はやめろよ。こつ見えても俺はまだ、二十八だぜ。」

「俺から見ればオッサンだよ」と言つて俺は、笑つた。

そのやり取りを見ていた【美紀】はキョトンとしている。

紹介を忘れていた・・・。

「紹介するよ。この人は、俺の親戚で鬼警官と呼ばれている 袴

田勇治さん・・・別名、オッサンな」俺はそう言つとまた、笑つた。

【美紀】は頭を下げて 「初めまして」と短く答えた。「何だ、

可愛い彼女を連れてきて、自慢か？」茶化すように、オッサンが言つてきた。

「彼女じゃねえよ」そういうやり取りを見ていた【美紀】は俺を突つついた。『そつか・・・本題を、忘れる所だった。』

俺はオッサンに誘拐事件の事について、簡単に説明した。すると、オッサンは驚いたように口を開けっぱなしにしていた。

「情報が欲しいんだけど、何か解つた？」説明を終えた俺は、口を開いてそう言つた。「情報と言われてもな」腕組みをしながら考えている様子だ。オッサンが考えていると、携帯が、鳴り出した。

【美紀】の携帯だった。彼女は、携帯に出て、何やら話している。

電話が終わつたのか、携帯を切り、俺の方を向いてきた。

「誰から？」 「家のお母さんから・・・」 「何だつて？」

「友達を誘拐した犯人から電話があつて、早くお金を、用意しろつ

て・・・用意出来なければ、命は無いって・・・」それだけ言っと、
【美紀】は崩れてしまった。今にも泣きそうだ。

一刻も早く、【美紀】の友人を助けなければ、ホントに、殺されてしまふ。取り敢えず、俺はもう一度、考えを巡らせて、考えてみた。すると、ある事に気が付いた。

『何故、犯人は誘拐した人物が、別人だと気付かないんだ？あれから、一日は経っている。それにもかかわらず、何故未だに身代金の要求をしてくる？』『犯人が解っていないのも、事実・・・だが、解るのも時間の問題か。』そう言えば、誘拐された当日、【美紀】の友人は彼女の家の前に居たと言っていた。すると、【美紀】と何か約束でもしていたのか？そう疑問に思った俺は、【美紀】に聞いてみた。すると彼女は、こう答えた。

「その日は、二人で遊ぶ約束をしてたけど・・・」

「他には何か、言っただけだったか？」彼女は少し考えていたが、何かを思い出したかのように口を開いて答えた。「新しく彼氏が出来たから、紹介するって・・・」やはり、手掛かりはゼロか・・・。途方に暮れてしまった。取り敢えず日も暮れているので、彼女を家まで送っていき、俺も帰る事にした。誘拐事件が起きてから、数日が経った。事件の進展は全く見せない。それどころか有力な手がかりも掴めないまま、時間だけが過ぎていく。

『このままじゃ、彼女の命が、危ない。』そう思った俺は、もう一度、事件を整理し始めた。

「事件当日、彼女は、【美紀】の家の前に居た。その時刻は、休日の午後だそうだ。【美紀】の家の前に居たのは、遊ぶ約束をしていたから・・・」そこで彼女は、誘拐された。だが、いくら女の子でも、抵抗位はするはずだ・・・」そこで、ある答えに行き着いた。もしかしたら・・・。俺は急いで携帯を手にとり、【美紀】のダイヤルをプッシュした。三コール目で、彼女は電話に出た。

「もしもし・・・」どこか不安げな声だった。

「もしもし、俺だけど・・・今大丈夫？」

「うん、大丈夫」 「誘拐された当日、【美紀】の友人が、彼氏を紹介するって約束してたんだよね？」

「うん、そうだけど・・・」

「その彼氏の名前分かるか？」

「うん・確か、菅沼洋平っていう名前だったけど」

「菅沼洋平か。分かった、サンキューな」そう言うと俺は、電話を切ろうとした。

「待って」電話を切ろうとした俺に、【美紀】は急いで呼び止めた。

「何？」俺は短くそう、答えた。

「何か解ったの？」

「解ったような、解らないような・・・まだ確信が持てないんだ。」

俺は、曖昧な返答をした。彼女は、短く

「そっか」とだけ答えた。電話は切れた。次に俺は、オッサンの所に電話を掛けた。ある人物について、調べて欲しい事があるからだ。そう。菅沼洋平に関しての事だ。俺は、オッサンに電話した。オッサンは一コール目で電話に出た。「電話に出るの、早いなあ」。警察は、そんなに暇なんすか？」

「バカヤロー、こっちはそんなに暇じゃないんだよ」

「電話で大声出さなくても、聞こえてるよ。相変わらずだな、オッサンは」

「で、用件はなんだ？世間話する為に、わざわざ掛けてきた訳じゃないんだろ？」

また、本題を忘れる所だった。

「オッサンに聞きたい事があるんだけど」 「何だ？」

「菅沼洋平って奴の事調べて欲しいんだけど、出来る？」 「菅沼洋平？何処かで聞いた事のある名前だな。」

「調べられるか？」

「俺を、誰だと思っていやがる。鬼警官だぞ。その位楽勝だ。」

「じゃあ、宜しく」そう言うと俺は、電話を切った。一時間後、オッサンから、電話が掛かってきた。俺は直ぐに、電話に出た。

「何か、解った？」

「いきなり、その出方は無いだろ。躰がなつてないな」

「余計な事はどうでもいい。で、何か解った？」

「おう」と一言言ってから、息を大きく吐いてから、次の言葉を口にした。

「菅沼洋平って奴の事についてだったな」 俺は短く

「ああ」とだけ答えた。

「その菅沼な・・・前科があるぞ」 「前科？」

「ああ、そうだ」 「前科って何したの？」

「詐欺だよ」 「詐欺？」

「そうだ。誘拐と偽って金を踏んだ来る詐欺だ。でも何で、そんな事が知りたいんだ？ 今回の事件とは、関係ないだろ」

「それが、関係あるんだよ。取り敢えず今から、迎えに来てくれな
い？」

「どうして、俺が迎えに行かなくちゃならないんだ」

「事件を解決する為にだよ」

俺はそう言って、不適な笑みを溢した。勿論、携帯越しだからオッサンには、分からないと思うけど・・・俺は今、車の中に居る。

約束通り、オッサンは俺を迎えに来てくれたのだ。

「で、お前さんみたいな素人がどうやって事件を、解決するんだ？」
オッサンは口を尖らせてそう言った。

「心配しなくても直に事件は、解決するよ。現に、謎は既に解いているから、後は犯人を問い詰めて、白状させるだけさ」オッサンは驚いたように、

「何？」と言ってこっちを向いた。車が蛇行しながら道を、進んで行く。

「危ないから、前を向いて運転しろよな」注意したが、本人は聞く耳持たずで、更に口調を荒げて問い詰めてきた。

「何か分かったってのか？」

俺は、

「ああ」とだけ答えた。そうこうしている内に、目的の場所に着いた。緊張した空気が、流れる。重い口を開いて、オッサンが聞いてきた。

「なあ、事件の謎を解いたのか？」

「さつきも言っただろ。事件の謎は解いたって。ヒントは電話で、オッサンが口にしてるよ」そう言うと、俺はうつすら笑った。

「あの女の子には、言わなくていいのか？」

「あの女の子？ああ、【美紀】の事か。」

「そうだよ。あの子、そうとう友達の事心配してたじゃないか」

「あの子にはまだ、言わないよ。今、真相を知ってしまったら、ショックが大きいだろうから・・・折りを見て、俺から話すよ。」

「そうか・・・」オッサンは、それだけ口にして、黙ってしまった。俺たちが今、いる場所は、古びたアパートだ。そのアパートに、目当ての人間がいる。

アパートを見ている時に、人影が二人出てきた。

俺が探していた人たちだ。俺は、意を決して車の外に出た。

それに続いて、オッサンも出てきた。二人揃って出てきたので、二人は驚いたように、俺たちを見てきた。

先に俺が口を開いた。

「菅沼洋平さんですね？」

「そうだけど？」菅沼はそれだけ答えた。俺は、続けて言った。

「最近起きた誘拐事件、知ってますよね？」明らかに二人とも、動揺している。

「知ってるけど・・・」菅沼はまた短く、それだけ答えた。一緒に居た女の子は、動揺しているせいか、こちらを見ようとはしない。

「貴方、前科があるんですね？」

「な、何が言いたいんだよ？」

「この間起きた誘拐事件、誘拐されたのは【美紀】って子じゃなくて、その友人なんです。」

「それがどうしたって言うんだよ？」 「妙だと思いませんか？」

「何が？」

「その誘拐された女の子、貴方の隣に居る人なんです」何かを言いたそうだったが、それは許さなかった。

「何故、今誘拐されている人がこの場所にいるのか、説明してもらいましょうか」

「何を言ってるんだ？コイツは、俺の彼女だ。誘拐される訳がないだろ。人違いしてんじゃねえの？」

「人違いか・・・そんなハズないですよ。彼女の写真、見せてもらいました。右目の下に、ホクロがある。貴方の隣に居る彼女も、ホクロがありますよね？右目に・・・」 「くっ！！」菅沼は、言葉に詰まったようだ。

俺は、自分が推理したように、真相を他の人にも話した。

「貴方は、前にも犯罪を犯している。それは、誘拐に見せかけた詐欺事件。」菅沼の顔が、青ざめていくのが俺にも分かる。俺は、続けて言った。

「今回も、その事件同様、誘拐を偽ったの詐欺事件。だけど、失敗したみたいです。」

「じゃあ、以前の事件では、成功したから、今回もやろうとした訳か」

「そういう事。でも、そう簡単にはいかなかった。彼女の両親が、不審に思っ【美紀】に、電話してたんですよ。だから、身代金の要求をしてきても、全く聞かなかった。」

菅沼は既に、フラフラの状態だった。俺は、菅沼の横に居る彼女の方を向いて、聞いた。

「あんたは、何故友人を騙す？【美紀】はあんたの事が心配だったんだぞ。何故、そんな友人の事平気で、騙せる？」

彼女は、重い口を開いて一言呟くようにして、言った。

「お金が、欲しかったから・・・既に彼女は、瞳に涙を溜めていた。白状したも当然だ。」

「最低だな」オッサンは、そう吐き捨てた。菅沼が、不意に聞いて

きた。

「何故、俺達が、犯人だと解った？」

俺は、大きく息を吸い、そして吐き出した。

「簡単な事さ。誘拐された当日、彼女は、【美紀】と遊ぶ約束をしていた。そこで、誘拐事件に巻き込まれた。」俺はそこで一息置きまた喋りだした。

「俺たちも最初は、そう思っていた。だが、実際は違った。そもそも、誘拐されたら、声を上げて、抵抗するハズだ。女の子であったとしてもな……。それに、誘拐された当日、彼女は、【美紀】に彼氏を紹介すると言っていた。それで、解ったんだよ。あんたらが共謀して、犯行に及んだって事がな。」

「そっか……」菅沼はそれだけ言つと、俯いてしまった。オッサンは、『行くぞ』とだけ言い二人を車に乗せて、車は走り出した。事件が解決した翌日、俺は【美紀】を近くの公園に、呼び出した。今日は、昨日と違い、澄みきった青空が、広がっていた。公園の入り口から、こっちに向かって歩いてくる人影が、見えた。【美紀】だ。彼女は、俺の前で立ち止まった。

「よっ、大丈夫か？ 顔色悪いみたいだけど……」

「事件の真相だよね……？」彼女は俺の問いには答えず、そう聞いてきた。全てお見通しのようだ。 「誰から聞いた？」

「藤森君の親戚の刑事さんから……」 「あのオッサンは余計な事を」 「事件解決したんだよね？」 「ああ、二人で今回の事件を考えてたようだ。」

「そっか……」また元気がなくなってしまった。俺は彼女を励まそうとしたが、良い言葉が見付からず、あたふたしてしまった。不意に彼女が、顔を上げて無理に笑顔を作り、『大丈夫』とだけ言った。

それを見た俺は、無言で彼女を抱き締めた。その瞬間、彼女は溜まっていた物を一気に溢れ出したのか、俺の胸の中で泣いた。彼女は、泣き止んで俺の方を向いた。

「もう、大丈夫だから」今度は、ちゃんとした笑顔だった。
彼女は、俺に丁寧に頭を下げてお礼を言い、また走り出した。かくして、俺が最初に体験した事件は、無事解決し一件落着という形で幕を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5964e/>

迷宮のストラテジー 1

2010年12月14日03時36分発行